

JIAMでは、2011年3月11日（金）から21日（月）まで、デカセギで来日していた日系ブラジル人の現状や動向の把握等を行う「多文化共生地域活性化調査」を行うため、ブラジル連邦共和国サンパウロ市を訪問し、様々な関係組織で聞き取りや体験による調査を行いました。前号では、この調査の出発日に発生した東日本大震災を通じ、現地で感じたブラジル日系人社会が持つ日本への思いやその絆を中心にご紹介しました。

今号では、その調査結果の中から、直接現地で体験し、感じたブラジル社会の現状を中心にご紹介します。

ブラジルの社会と市民生活の現状について

全国市町村国際文化研修所教務部 副主幹 林 敬治
主 査 出口 利明

1. はじめに

私たち2人は、2011年3月11日（金）から21日（月）までの期間、ブラジル連邦共和国サンパウロ州サンパウロ市を訪問した。

目的は、経済危機により帰国した日系ブラジル人に対する現地での支援の状況および今後の来日動向を調査すること、ブラジルの文化・習慣、制度を直接体験し、今後の多文化共生研修に活かす「多文化共生地域活性化調査」を行うことである。

<調査日程>

3/11	日本出国
3/12	サンパウロ市到着
3/13	リベルダーヂ（東洋人街）視察 滋賀県人会館訪問
3/14	JETROサンパウロ事務所訪問 在サンパウロ日本国総領事館訪問 国外就労者情報援護センター（CIATE）訪問
3/15	サンパウロ州教育局教育規範研究調整部訪問 サンファミリー KK（人材派遣会社）訪問 NPOグループニッケイ訪問
3/16	モジ・ダス・クルーゼス市起業家訪問 婦伯労働者情報支援センター（NIATRE）訪問 ブラジル移民史料館訪問
3/17	ブラジル日本語センター訪問 石川県人会館訪問
3/18	カエル・プロジェクト事務局訪問
3/19	サンパウロ大学視察 エンブー市視察
3/20、21	日本帰国

近年、ブラジル経済の好調とともに日本でもブラジルへの関心が高まりつつあるが、日本では、ブラジルに関する資料はまだ少なく、どのような社会なのか日本ではあまり知られていない。

本稿では調査の中からブラジル社会の現状について、この11日間を通じて、見て、感じて、気づいたことを中心に記してみたい。

2. ブラジルの経済状況について

ブラジルの経済状況について日本貿易振興機構（JETRO）サンパウロ事務所でヒアリングを行った。

2014年のサッカーワールドカップ、2016年のオリンピック開催を控え、ブラジル経済は絶好調である。

サンパウロ市内は、日々街の拡張が行われており、10年前は二束三文であったような荒れ地が、現在手も出せないほど地価が高騰しているそうである。まさに今土地バブルの中にあるようであった。

そのような経済の好調とともに物価も上昇しており、サンパウロ市内の商業施設で昼食をとったところ、30リアル（約1,500円）もしたことから、日本と変わらない物価に驚かされた。

給与水準も高まっており、給与が減少している日本から帰国する人も増えているようで

ある。ただし、それは条件に合った職がある人の場合であって、デカセギ帰国者で特殊技能等がない場合、多くは、日本の経験は考慮されないため、なかなか思うような職に就けないようである。単純作業で比較すれば、随分安くなったとはいえ、まだ日本の給与の方が高いとも聞いた。

また、ブラジルの家電市場等では、近年急速にブランド力を高めた韓国企業が、積極的な攻勢をかけており、日本企業は苦戦しているようである。液晶テレビ等はサムスン、LGが目立った（これは乗り継ぎをしたドバイ国際空港でも同様であった。頑張れ日本企業！）。



サンパウロ市内中心部のビジネスビル群とショッピングセンターの様子

3. ブラジルの文化・習慣・制度等について

(1) ブラジル人と市役所について

在日ブラジル人の知人から「市役所は敷居が高い」ということをよく聞く。一方、日本の市役所の職員からはブラジル人を含む外国人住民に地域で生活するときのルール等を説明するオリエンテーションをしたいが、なかなか参加してもらえないという話もよく聞く。

今回訪問するにあたり、ブラジル人にとっての市役所の役割を確認し、また日本の市役所についての印象と比較することにより、地域の課題の解決のヒントになればと考えた。

①市役所の役割について

ブラジル人にとって、市役所はなじみのない場所である。というのは、日本では、住

民登録は市役所の役割だが、ブラジルではCartorioと呼ばれる登記所が出生、婚姻等の登録の業務を行っているため、市民はほとんど市役所へ行くことがないのである。

また、何らかの手続きが必要となったとしても、提出書類が複雑であるためDespachanteと呼ばれる代理人（日本でいえば行政書士）に依頼することが多く、市民が市役所と直接関わりをもつことはほとんどないとのことであった。

滞在期間中に何人かの市民に市役所について質問をしてみたところ「何をしているかわからない」「税金の徴収だけをしているのではないか」「許認可を行っているだけではないか」と市役所の機能についてははっきり答えられる人はほとんどいなかった。

サンパウロ市役所を見学したが、1階が美術展をやっているほかは、ひっそりとしており、日本の市役所でいう、市民窓口の様なものや市の業務を紹介するようなパンフレット等は全く見当たらなかった。

②日系ブラジル人からみた日本の市役所について

では日系ブラジル人にとって日本の市役所はどのように映っているのか、日本での生活体験のあるブラジル人に聞いたところ、日本の市役所の評判は非常に良かった。わからないことがあれば質問すると何でも丁寧に教えてくれるし、通訳者を配置しているところもあることから総じて肯定的な意見であった。

悪い点については、なかなか話してくれなかったが、多くの人に共通していたことが、必要な情報が届いていないということであった。日本の自治体が出している多言語の情報誌等については、その存在を知らない人も多く、情報の多くはブラジル人のネットワーク内で得ていたそうである。また、情報に接することがあっても、ときどき翻訳が間違っているという指摘もあった。これは、日本の制度をわかっていないブラジル人が翻訳してい

る場合等、日本人側のチェックがない場合にありがちのようである。

そのほかに社会保険等の制度が非常にわかりにくいという声もあった。これは、お知らせするパンフレットをそのままポルトガル語に訳しているだけであることが多く、誰も読まないとのことで、制度のメリット、デメリットについてきちんとポイントを押さえて説明した方がいいのではないかとアドバイスがあった。

多くの経費をかけて翻訳しているものが、翻訳自体を目的としているため、無駄になっているのではないか。せっかく翻訳するのなら何のために、何を翻訳するかを明確にすることが大切ではないかという意見を多くいただいた。

③市役所等の広報について

ブラジルでは市民にどのように広報しているのか、それを知れば日本の市役所の広報の参考になるのではと考えた。

サンパウロ市の滞在中に、あまり紙のちらしを見ることがなかった。現地の人に聞いてみると、それは、紙で広報を行ってもゴミとして捨てられるからという答えだった。

ではどのようにしているかという、文字が読めない方もいるので、広報は、テレビ、ラジオ、新聞、インターネット等を利用して誰でもわかるように行っており、滞在中もテレビから政府広報が何度もくり返し放送されていた。



サンパウロ市役所 外観

(2) 生活習慣・制度について

ブラジルの多くの制度について疑問に思っていたことを出発前に日本で調べてみたが、文献があまりなく、あっても情報が古いこと等から多くの疑問をもったまま、今回の調査

に臨むことになった。

幸いなことに日本へ留学経験があり、日本の制度も知っている日系ブラジル人の弁護士であるアンドレ・ハヤシ氏に話を伺うことができた。

様々な有益なアドバイスをいただけたが、ここではその中でも特に印象に残ったものについて記したいと思う。

①ごみの捨て方について

日本の地域住民と日系ブラジル人との間では未だにこの問題がある。ブラジルでのゴミの捨て方について実際に現地で見て話を聞いてみた。



路上に捨てられたゴミ

サンパウロ市ではゴミの収集はサンパウロ市役所の業務である。ゴミの出し方等のルールは各区で決められている。資源ゴミとそれ以外のゴミ程度の分別はあるが、日本のように細かい設定はしていない（富裕層の住むマンションでは細かい分別をしているところもあるようである）。

路上にはいたるところに不要なものを投げ入れる大きなゴミ箱もあり、市民はそこに捨てて



路上に設置されたゴミ箱

いく。前記のようにゴミ捨て日のルールもあるようだがあまり意識されていないようである。

また、歩道のあちこちにゴミが散乱していて、正直なところ綺麗とは言い難い状況であった。余談ながら、ある地区を歩いているとき、

道端にガラスの破片が散らばっていた。なぜか聞いてみると強盗が車のガラスを割った跡ということであり、治安の違いにも驚かされた。

②住民登録について～どこで行っているのか～

日本でいう住民登録とは少し違うが、自らの情報については先に記したとおりCartorio（登記所）で行われている。ブラジルでは、出生、婚姻等があれば、基本的には同じCartorioで変更があるごとに登記を行っていく。このCartorioは、公的組織ばかりでなく個人が開設しているところもあり、また土地売買や会社登記等もその登記の業務を行っているCartorioが窓口となる。

また、市役所はこの登録情報を把握していないため、市民が何らかの公的サービスを受ける際には市民自らが証明書等必要書類を用意して自ら市役所に申請する必要がある。例えば就学適齢期の子どもについて、住民登録に基づいて入学案内を送る日本に対して、そのような情報がないブラジルでは、市民自らが市や州に対して申請を行わねばならないのである。

住民登録がないにもかかわらず、どのように人口を把握しているのか不思議であったが、連邦政府が行う国勢調査（全戸調査）によりそれを確認しているということであった。

③公共の場の観念について

～公園で騒いでいる人はいるのか～

日系ブラジル人が集団で公園や家でパーティーを行うことが騒音として地域住民との摩擦の原因となっていた。今更ではあるがブラジル現地の状況について確認を行った。

アンドレ・ハヤシ弁護士によると公園は市民の公用財産であることから、事前の使用許可が必要であり、それがない場合には罰金刑が適用されるということであった。

実際我々もいくつかの公園見学をしたが、公園でシュラスコ（ブラジル式焼き肉）パーティー

を行っている人々を見ることはなかった。

今回の訪問では確認していないが、シュラスコ等については、安価で行えるような施設もあり、また富裕層等は家に設備を備えているところも多く、道端で周りの迷惑を考えず行っている例はあまりないと思われる。

④その他の制度等について

アンドレ・ハヤシ弁護士からは、そのほかに税制度をはじめ、社会保障制度等いろいろなブリーフィングを受けた。そこに共通するのは、「合理的な社会の仕組み」「制度の利点とペナルティが明確になっている」ところにあるように思えた。

以下そのことについて具体例を挙げて説明したい。

<合理的な社会の仕組みについて>

日本の場合は、市役所等が多くを経費をかけて丁寧な市民サービスを行っている。逆にブラジルでは、公的機関はなるべく無駄なことをしない代わりに社会がうまくまわるための仕組みを作るという考えが根底にあるように思えた。ここでは、税金と選挙の事例を紹介したい。

○税金について

ブラジルではCPF（納税者番号）の制度があり、市民はCPFカードを提示しないと銀行口座の開設、高額商品の購入、賃貸等社会生活が何もできないようになっている。税金の滞納があると、銀行口座開設ができなくなり、口座が凍結される場合もある。

そのため、市民は税を払わざるを得ない仕組みになっており、税当局が何度も催告に來たりすることはあまりないようである。ブラジルではそのほかにRG（身分証明書）や免許



CPF（納税者番号）
銀行口座開設時に必要となる

証の提示を様々な場面で求められる。現在、それらの証明書を一つに統合しようという動きもある。ITが本格化した今、より効率的な運用を目指しているようである。



街角のビル壁面に市民が支払った税額を表示している

○選挙について

日本では、多くの経費をかけて選挙管理委員会から投票日や投票所を案内する通知書をそれぞれの家庭に送付している。

対して、ブラジルでは、管轄する選挙裁判所に対して本人が必要書類を持って選挙人登録に行き、登録番号を取得し、番号ごとに指定された投票所で投票を行う。憲法で国民の投票の義務が規定されており、投票しない



選挙登録証と投票証明書

場合はペナルティを負うことになるため、皆投票に行かざるを得ないシステムになっている。

＜制度の利点とペナルティが明確になっていること＞

11日間の滞在で全てがわかったわけではないが、この「～しなければいけない」ようにルールを整備した社会では、そのルールを破った場合のペナルティが市民に対してきちんと周知されているように感じられた。逆に、ペナルティのないものはあまり守られていないようにも思えた。例えば、ゴミの捨て方等は、ルールがあることすら知らない人が多かった。

⑤学歴社会ブラジルと帰国した子どもたち

今回の調査で訪問した先々で聞いた話の中で、ブラジルでは、思っていた以上に学歴を重視していることに驚かされた。

ブラジルの大学進学率は2008年現在約14%（ブラジル地理統計院調査）である。

その中でも、学歴により就ける職、給与、待遇等も大きく違い、また出身大学によって就職条件に大きな差があるということであった。一流大学を出ていないと賃金の高い職を得るためのスタートラインにも立てないということを知られた。

ブラジル日系社会が社会的ステータスを短期間に上昇させたのも、教育に力を入れ、多くの子弟をサンパウロ大学に入学させ、医者や弁護士等社会的地位が高いといわれる仕事に就かせたことが要因と言われている。「サンパウロ大学に入りたかったら日系人を一人消せ」というジョークがあったくらいである。

かつて、そのように周りや本人の努力により一流大学への入学の途が開かれていたが、州政府教育局の担当者に話を聞くと、現在は、サンパウロ大学等の一流大学への進学は富裕層が通う私立高校出身者がほとんどであり、公立学校からの入学は相当困難のようである。

そのような状況の中、日本から帰国したブラジル人の子どもたちの状況は決して明るい状況にはない。州政府も様々な方策を考えてはいるようであったが、制度上の違いから帰国した子どもの正確な数がつかめておらず、また、帰国者が州政府まで相談に来ることはほとんどない。そして一つの民族にだけ何らかの支援を行うことは難しいというような事情から特別な施策がされているわけではないようであった。NPO等による支援活動もなされているが、費用や人員の面の制限があり、決して十分な状態ではないようである。現実的には、帰国して大学まで行くことは相当困難な状況のようであり、子どもの教育を考えて日本へ残った家族が多いのもこの状況を見ているとわかるような気がした。



サンパウロ大学経済学部棟

4. おわりに

誌面の関係で、最後になったが、今回の調査では、デカセギに来日していた日系ブラジル人の帰国後の状況、再来日の動向等の聞き取り調査も行ったので概要をここでご紹介したい。

帰国支援事業等でブラジルへ帰国したデカセギ労働者に対する支援の状況であるが、帰伯労働者情報支援センター（NIATRE）等では、求職活動の支援、ブラジ



NIATREが入る日伯文教ビル

ル国内で自立して生活していくための起業支援、帰国子女に対する義務教育支援等を実施しており、NPO等でもブラジル国内の就職情報を提供する等、人的にも財政的にも大変厳しい状況の中で行われている。NPOは、ボランティアによる活動であり、支援を求めている人には対応できる範囲で支援しているとのことであり当初思っていたよりも規模は小さく、十分に利用されている状況ではないようであった。デカセギ帰国者の多くは、財産を作って帰国後に起業するという目的を成功させることができず、恥ずかしいという気持ちが強いいため、人前に出てきて、このような支

援サービスを積極的に利用する考えが薄いようである。

また、デカセギのために来日する日系ブラジル人の状況は、リーマンショック以来大きく減少している。初めてデカセギに向かう者は皆無となり、経験者であるリピーターが中心とのことであった。今回取材した人材派遣業者からも、労働者として受け入れる日本の企業も、日本の生活や文化にも慣れているリピーターを希望するケースがかなり多いという状況も聞くことができた。そのリピーターにとっても、単純労働と比較すると、まだ日本の方が残業代を含めた賃金が高いので、仕事さえあれば再度日本へのデカセギを考えている人たちも多いようである。ただ、2011年3月の東日本大震災による日本企業への影響、放射能の危険性について大きく報道されたため、今後の日本の動向が注視されている状況であり、調査時も日本へのデカセギをキャンセルする連絡があったと聞いている。

経済発展中のブラジルでは職が無いわけではないが、ブラジルは日本で想像していた以上の学歴社会であり、サンパウロ大学等の有名大学を卒業していないと賃金の高い職につくことが難しい事情がある。日本でのデカセギ経験だけでは評価されず、何らかの特殊技能（日本語の通訳、専門技術等）を身につけていないと評価されにくく、単純労働としての需要しかないようである。ただ、日本の経験を重視して、ブラジル本国で雇用する企業も一部出てきており、今後の展開が注目される。

最後に、皆様に少しでもブラジルへの興味をもっていただければと願う次第である。

今号では、誌面の都合上、調査結果を十分にご紹介することができなかったが、そのことについては、弊所で実施する研修をはじめとした様々な機会を通じご紹介していきたい。